実務者検討委員会（第４回）　議事概要

日時：平成３０年４月９日（月）１６：００～１７：５０
場所：中央合同庁舎４号館　共用１２０２会議室

【議事】
１．第一次中間取りまとめ（案）について
２．共通メタデータフォーマットの検討状況について
３．デジタルアーカイブアセスメントツールの検討状況について
４．質疑応答・意見交換
５．ジャパンサーチ（仮称）の連携･運営及びキュレ―ションページの進め方について
６．その他
・ジャパンサーチ（仮称）との連携促進のための説明会について
・知財事務局において実施する海外調査について

【概要】
１．第一次中間取りまとめ（案）について
○知財事務局より資料１に沿って説明。
・ 実務者検討委員会（第３回）会合で報告した第一次中間取りまとめ（案）より、大きく変更があった部分について説明。
・ 「評価ツール」について、第三者から評価されるイメージを与えると意見が多数あったことから「デジタルアーカイブアセスメントツール」に名称を変更。
・ 「標準メタデータフォーマット」について、フォーマットの果たす役割から「共通メタデータフォーマット」に名称を修正。

２．共通メタデータフォーマットの検討状況について
○国立国会図書館より資料２－１から２－４に沿って説明。
・連携フォーマットのデータベース定義について、「タイプ」「メタデータの権利表示」の項目はヒアリングを元に内容を修正。議題５で改めて意見を頂きたい。
・ラベル定義のうち、共通項目ラベルの付与において、「必須項目」「あれば必須の項目」「任意項目」の３段階で設定していたが、「必須項目」「あれば必須で付与する項目」の２段階に変更。
・利活用フォーマットについて、第一次中間取りまとめで内容確定ではないが、これを元にジャパンサーチ（仮称）試験公開版の開発を進めていく。

３．デジタルアーカイブアセスメントツールの検討状況について

○知財事務局より資料３に沿って説明。
・「メタデータの整備・提供」や「デジタルコンテンツの作成・提供」、「オープン化・二次利用可能性」、「持続可能性」、「組織的基盤」などの項目に分けて整理。
・各アーカイブ機関で目指すべき方向が明確になるよう「標準モデル」「先進モデル」「つなぎ役モデル」という段階分けで整理。
・アーカイブ機関・つなぎ役自らの達成状況を把握するためのツールとして活用されることを想定し、評価結果の提出を求めたり、外部へ公表したりといった、アーカイブ機関にとって負担になる形での運用は考えていない。

４．質疑応答・意見交換
（山崎委員）デジタルアーカイブアセスメントツールについて、いったん、こういう形で公開されるのか。よく見方がわからないが、「-」になっている場合は、左側を踏まえての右側なのか、それぞれ独立したものなのか。
（城田）先進モデルで「-」となっている箇所は同左と同意。
（山崎委員）具体的なところで、気になったところがある。「標準モデル」の「標準」は何を意味しているのか。基礎的なアーカイブ機関なのか。「標準」と言いつつも、難しいものと簡単なものが混じっている。
デジタルアーカイブ関する知識を持つ人材という点で「確保している」と書かれてしまうと、それを達成している機関はほとんどない。しかし、「初歩的な」とか「基礎的な」という言葉がたされると満たされるところが多い。体制として確保していなくても外部識者の意見を聞くことはできる。「先進モデル」になるとむしろ自前でできるようになって不要になる。逆ではないか。
（高野座長）みんなが目指すべき目標が標準モデル、国や分野を代表する組織は少し踏み込んだ先進モデルを目指す。つなぎ役は役割が違うので、違う観点からの貢献を目指すためのつなぎ役モデルを目指す。タイプの違いに応じてモデルの整理を行った。
達成度については、去年より今年、今年より 5 年後に良くなっている、頑張っている態度や目標を評価する方法が社会的に受け入れられているので、その雰囲気を盛り込んでいる。
（山崎委員）今の内容を説明として文章にまとめて記載しておくとイメージが湧きやすい。
（高野座長）工夫する。
（杉本委員）中間取りまとめ案に対して、出だしでアーカイブの範囲を広げていることはとても良いが、その後全体的に従来型の文化財のイメージ中心とした記載になっている。報告書のどこからが範囲を限定した話なのか分かりづらい。アグリゲーションモデルについても従来の文化財を中心としたイメージだと、90 年代のモデルから何が変わったのか分からない。

（高野座長）ジャパンサーチ（仮称）を具体化した時に、一番分かりやすく足並みがそろいそうなのが文化財となっている現状がある。ここに科博のデータが出てきて、「みちしる」が連携して、ジャパンサーチ（仮称）が出来上がった際に文化財だけではないという事に気付いてもらう。曖昧にしておくことで変な要求もこないし、やれるだけのことはやれる。
（山崎委員）暗黙の内に実務者検討委員会が文化財のことしか考えていないと思われることはマイナスだと思う。今できる範囲をフォーカスしているという事を書いておく方が良い。
（細矢委員）文化財中心だけではないというイメージを潜在的に持ってもらうために、ゴールを明確に示したほうがいい。たとえば、クックパッドの例などは文化財ではなく、そういう例が取りあげられているのは良いと思う。非文化財的な事例がもっと盛り込まれるといいと思う。いま、たとえばジャパンサーチ（仮称）のデータ変遷の例として「刀」が取り上げられているが、あえて文化財ではないものを選ぶことで、文化財に限った話ではないことが伝えられると思う。
（渡邉委員）アセスメントツールの利活用促進に向けた取組について、利活用を意識した報告書になっている割に標準モデルはサボっている印象がある。「ブログや SNS 等を通じて、デジタルコンテンツに関する情報を提供している」と「分野内での情報共有」の違いが分からなかったりするので、標準モデルについてはもう少し書きようがある。コミュニケーションの糸口を用意するという意味合いになると良い。先進モデルの「ブログや SNS を月一回更新する」だと用意したら終わりという印象を受けるので、どのように情報を発信すれば良いかわからない場合のアドバイス的な内容や、問い合わせ窓口を作るといった内容があった方が良い。
もう一つが、第一次中間取りまとめ（案）の P.21 の今後の検討課題について、議論だけではなく実践的な利活用の取組を行ってみて、そこからのフィードバックを活かせるようなテスト的な試みを行っていきたい。脳内のリソースだけで議論を行うより、現場でどのように使われるのか、どのような想定外の事が起こるのかなど、織り込んでいく場を設けた方がより良いものが出来る。
（高野座長）評価の項目について精査が必要だと強く感じた。
来年度のプログラムとして、有志でトライアルのワークショップを開くといった提案も検討して行きたい。
（生貝委員）デジタルアーカイブが目指す方向性は、技術革新や社会経済的状況の中で常に変化し続けている前提がある中で、データが重要だという国全体の取組の中の一番基盤的な、根底的なインフラを担う物に他ならない。これをオープンデータの取組と言っていいかも非常に悩むところ。データ主導経済への流れの中でどういった関係があるのか、目指すべき道筋について、研究データ、産業データへの広がり全体の中で検討していただきたい。

アセスメントツールについて、変化が激しい重要な部分については官民でモデルガイドラインないしはアセスメントのツールをノンバインディングで作ったうえで、それを実際にインプリメンテーションすること、官民共働で必要なルールを作り、それを回すことが様々な分野で重視されている。ルールを作る事よりもルールを回すことが重要で、アセスメントツールを作るという事は、常に評価を回し改善していく事と不可分である。
（高野座長）小さなビジネスの小さなマーケットがあるが故に、大きな理想的な物が作れないという事はこの社会が体験していること。データ主導経済が一つのヒントになって広げていけるように感じる。
これまで内閣府の様な組織がアセスメントツールを作っても実際に使う場面になると例外が多かった。今回は実務者検討委員会があと 2 年程度続くという事で、フィードバックを２～３回まわすことで、みんなが納得するようなルールを作ることが一番重要なアウトプット。
（山崎委員）本会合の設置期限が 3 年であるが、その後の事について、何らかの形で官民協力して維持していくことを検討していく事が必要。
報告書の最後の６番にある今後の課題について、アーカイブの評価や懸賞についても検討していく必要がある。大阪市立図書館は Library of the Year を受賞後、利用が倍増したように、優良事例の表彰は重要であり、今後の課題として検討してほしい。
（高野座長）グッドプラクティスをみんなが認めて同じ方向を目指すことが 6 番の中身かもしれない。
（北本委員）オープンサイエンスの領域で研究データリポジトリのアセスメントが始まりつつある。色々なアーカイブの研究者が集まりお互いにアセスメントしながら、プロセスを共有して学んでいくということを行っている。評価に対応するプロセスを学びにすることが上手くいけばそれが新しい方法になる。アセスメントツールは数値目標的に使われるよりも、前年よりもよい方向に進んでいることを確認するような使われ方がよい。
（生貝委員）権利情報に該当する箇所について、メタデータに関しては極力 CC0 で提供してもらう一方で、サムネイルを含めてコンテンツの部分について、ガイドラインでも記載されている部分ではあるが、例えばパブリックドメインとはグローバルにおいてどういった意味なのか、例えば裁定制度に基づいて公開している物について外国人が見てもわかりやすい表示をどのように行うのか、どういったライセンスを付ければよいのか、Europeana と DPLA と併せて大きな論点だと認識している。その他にも官民連携でデジタル化を行う際に、スポンサーからの資金が入る事で営利目的では使用できないといった契約的な制限がかけられることも非常に多いといった表記の仕方も海外では工夫している。オープン化して利活用を進める上で一つのキモだと思っているので、分かりやすく状況等整理した上で検討が出来ると良い。
（高野座長）利用者が迷いやすい項目について、具体的なシステムでの発信はどのよう

に行っているのかという事が一覧で実例を見られることが参考になるので、良い事例を参考にしつつ自分も良い事例になる事で学びになるようなこともこのフォーマットで出来るよう工夫したい。
（杉本委員）アセスメントツールについて、現在動いている機関向けであると思うが、これからアーカイブを作りたいと思っている機関向けのガイドラインは無いのか。
（高野座長）関係省庁等連絡会・実務者協議会のガイドラインがあるが、修正が必要。
（杉本委員）ツールの名称は、報告書本文でも使っている「自己点検・評価ルール」では如何か。
（高野座長）そのあたりも本日ご意見いただきたいところ。「評価」は偉い人が行うというイメージがある。曖昧に書いて誰が評価して誰が点検するのか分からない形で書いておくというのも一つの案。
（細矢委員）地球規模生物多様性情報機構（GBIF）でも、各ノードの活動についてのセルフアセスメントのツールを配布している。アセスメントそのものは、気づきにつながる。ただ、これからスタートしようとしている人が読んでもわかりにくいので、わかりやすく噛み砕いた事例を併記したほうがとっつきやすい。これをもとに発展させてほしい。
（荒木委員）小規模館が評価項目を見て後ずさりすると逆効果になってしまう。使い方がそれぞれの場面によって違うかもしれないので、よくできたところを評価できるような形で使ってもらい、全体的として情報共有が促進されるような形になると良い。
項目によって当てはまるものもあれば、少し難しいものも出てくるし、つなぎ役の部分でも違うアプローチ方法が出てくることもあるので、自由に使わせてもらえればと思う。
（高野座長）このツールが強制力を持ち、内閣府が点数を付けて回るようなことは絶対に起きない事だと思っている。今年度は使い方をコレクトして上手く育てるような形に役立てていければよい。
（後藤委員）評価については、現場に係るようなところからボトムアップで丸を付けて行ったらどうなるのかという事を、デジタルアーカイブ学会のような色々なところで回して行ってフィードバックするような作り方が出来ると良い。
（山崎委員）新たに加えられた文章に、CC0 や CC BY といった条件で公開することにより、どのように利活用されたかが分からなくなるおそれがあるとの指摘が付け加えられたことは重要だと思う。これが原因で公開を憚るところが多い。典拠情報を示してとお願いするだけでは厳しい。レトルトカレーのパッケージに大阪市立図書館の画像が使われていて、偶然に見つけた例がある。技術面で追跡できる仕組みも検討が必要ではないか。
（高野座長）本来権利が無いのに権利があるかのように書く人の様なプラクティスは止めようというのが真のメッセージ。権利が無いのにカレーのパッケージに使われることは阻止できない。そもそも法律で保障されている権利の範囲はどのようなものなのかと

いう事をここで厳しく見つめなおして正確な記述をしてもらう。権利状態が CC BY ならば CC BY と謳うべきだし、CC0 なのにこれは使うなというのはおこがましい事で、それをリクエストする根拠が無いと我々は思っている。それを変えてほしければ法律を変えなければいけないという事であるが、要らぬ忖度をしているという事が日本の組織には往々にして見られる事なので、もっと自由に出来ることがあるはずなのに、海外の美術館が実践して初めてこんなことが出来るのかと驚くようなことが起きている。そのような状況をこの機会にメッセージとして出すという意味もある。

（山崎委員）アーカイブ機関やコンテンツ所有者を安心させないと前に進めない。大阪市立図書館では良い事例と考えているが、そう思っていないところもある。技術的にできる可能性もあるので、そういうことを書いておけばだいぶ進みやすくなる。

（渡邉委員）アセスメントツールの延長線上として、全国の小規模アーカイブ機関の人達が参加して、組織的基盤の取組やメタデータの整備などについて、各機関で行った解決方法などをシェアリングし合うようなプラットフォームが出来るとすごく良いと思う。実務者検討委員会がヒアリングを行って結果を持ち寄るよりは、リアルタイムに各項目について各組織がシェア出来るようなコミュニケーションの場があると良い。そうすればここに入っていない例外や優れた事例の参照が出来る。

（高野座長）実務者検討委員会がオフィシャルに行う必要はないので、どこか別の機関が行った事例を参照して検討出来ればと思う。

（田良島委員）博物館等が、法的な位置付けの動きとか現状をわかっていないケースがあることが問題。20 年くらい前までは博物館の運営はソフトローの塊だった。法人化になって、そこ自体が足かせになって、だんだん整理しているところ。私たちの業界では話をしているが、理解を得るにはまだまだ時間がかかる。一般的な話だと、写真の著作物（平面物の撮影）に関しては最高裁の判例があり、所有者側が敗訴しているが、未だにそれを主張する人が多い。個人は仕方がないとしても、公的セクターはそれをすべきじゃないと思う。関係者にはそう伝えている。私どもの所蔵している画像でも著作権があったり、なかったりする。そのなかでもソフトローが働く部分と働かない部分がある。個々の権利関係を示す必要がある。そこをうまく運用できるか、安心を与えることができるかが重要なポイントになる。

（後藤委員）データのオープン化という課題の時に常に気になっている事は、データを使った人たちもその成果をアーカイブしてアーカイブ機関にフィードバックしていくような循環のプロセスが必要であると考えている。

（生貝委員）明らかにハードローとソフトローがあり、法律規範と社会規範があるという事で、どちらも大事な事はこれからも変わらない中で、どうやって新しいソフトローを作り直していくかという事に他ならない問題。Europeana でも CC0 やパブリックドメインとして公表している物については、すべての作品ページからパブリックドメイン作品利用ガイドラインへリンクを張っており、その中に出典を張る事、あるいは再利用し

たものが色々な形で役立てていくといった事を記載している。加えて強調しているのが過去の文化的作品をオープンデータとして自由に活用していく事は文化的軋轢を生み出しかねないという点。例えば夏目漱石の肖像にメガネを外したりすることは許されても、宗教画等の利用に際して様々な事を行うことについて「Culturally Sensitive（文化に配慮）」をキーワードに掲げて配慮を求めている。この分野のデータのオープン化を進めていく上で強調しておかなければならない。
（高野座長）これらの意見を参考に事務局で修正を行い、最終稿を確認頂いた上で公表を行う。

５．ジャパンサーチ（仮称）の連携･運営及びキュレ―ションページの進め方について
○国立国会図書館より資料４に沿って説明。
・ 連携する必要がある分野について、試験公開版についてのデータ提供機関を取りまとめたが、引き続き本公開に向けて連携を推進する。
・ 検索結果の範囲指定に用いる「タイプ」についてデータ提供機関と調整中。
・ 民間機関のメタデータなど、CCO の原則に対応が出来ない場合はデータベースごとに利用条件が分かる仕組みを用意する。
・ ジャパンサーチ（仮称）の利用の際には出典等の情報を明記するよう利用者に協力を促す。
・ ジャパンサーチ（仮称）の試験公開版公開後は、分野を横断した運用体制について、各分野の協力が必要。
・ キュレーションページの制作方針について、エディタ機能を使用してページを作成できるのは、当面の間データ提供機関やつなぎ役のみとする。
・ キュレーションページの名称をはじめ、コンセプトやテーマの方向性についても検討する場及び体制が必要。

質疑応答・意見交換
（渡邉委員）キュレーションの場合はコンテンツそのものに人気がある場合もあるが、キュレーターに人気がある場合もある。コンテンツを作っていて、知名度があって、テーマに似つかわしい方に依頼をして、テーマ設定やセレクションをしてもらうコーナーがあった方が人気は出る。その人が信頼を得ているからその人がまとめたサイトは素敵だという回路で考える。顔が見えない方がまとめていると当たりはずれがあるので、キュレーターを何人かピックアップするのも良いアイディアかと思う。
（高野座長）キュレーションページという名称も少し違う感じもある。Europeana ではギャラリー（Europeana Galleries）という仕組みを作って、小さくてインフォーマルな物から予算を付けた大きなものまで、同じ仕組みでまわしていてコレクションしてあり、皆が見たときに色々な使い方がある事に気が付く。全体のコンセプトを上から与え

て、色々な人にバラバラに作れと言っても広がりはあるがインパクトが無いものになるかもしれない。著名な人が集めた作品であれば数が少なくてもその人の蘊蓄が聞けるのであれば見てみようといった事もあるので、色々な方法を検討していきたい。
（杉本委員）国立国会図書館サーチのタイプの名称について、「図書館資料」では如何か。キュレーションページについては、Wikipedia の記事の様なものを想像すればよいのか、またページのサイズ感や使い方についてはどのような想定なのか教えていただきたい。
（徳原補佐）資料４の p.7 にイメージを載せている。代表画像があって、簡単な解説があり、画像を見る部分では、ジャパンサーチ（仮称）が連携しているコンテンツを一番目はこれ、二番目はこれとキュレートして出す。メタデータをクリックすると一覧が出るようにとか、検索キーワードをあらかじめ設定しておいて、ダイナミックにも表示できるし、静的にも表示できる。Wikipedia との違いは、誰でも編集・発信できるというよりは、データ提供機関の人が自分の持っているデータと、持っていないがジャパンサーチ（仮称）で集約されているデータをまとめて出せるところと思う。
（杉本委員）秋田県の名物ページなどを作るとかなり大きなものになる。カテゴリーを作って構造化していくことが必要になるか。
（高野座長）現段階ではそこまで考えていなく、このページを簡単に作れる仕組みを提供できそうであるという事を紹介したまで。使い方も含めて今後検討の余地がある。
（細矢委員）ジャパンサーチ（仮称）は仕組みとしてはとらえどころ・実態がない。ユーザーにさらすのはキュレ―ションページになる。ユーザーはどんな層を想定しているのか。それが不明ではキュレーションができないし、整理しておくことが大事。
（徳原補佐）国際発信も大事だと考えているが、欧州でも、Europeana はキュレーターや図書館関係者しか知らない状態。なので、まずは日本人ユーザー向けに幅広く楽しめるものを作りたい。キュレーションページが Google 検索で Wikipedia よりも高い検索順位でヒットして、多くの人にクリックされることを目指したい。ジャパンサーチ（仮称）を知ってもらうためにキュレーションページを用意する。専門家だけでなく、誰でもアクセスできるものをイメージしている。
（高野座長）フランス国立図書館の Gallica のようなものを作れないかと国立国会図書館に言い続けてきて出てきたもの。想定したものとはややずれているが。どういった対象にどういったコンテンツを提供すればよいか、皆さんで議論して要望を出していけば良いと思っている。連携用のメタデータを集めて公開していく仕組みが動き出して国民に公表したときに、検索窓が一つだけあるだけではガッカリすると思うので、プラスアルファの部分を皆様からアイディアを出して頂いて作っていきたい。渡邉研究室やつなぎ役の有志が発信していくことが必要ではないか。
（田良島委員）ジャパンサーチ（仮称）を説明する際に、我々は魚を捕る側、ジャパンサーチ（仮称）が卸売、それがどう利用されるのか、という話になると思う。ＮＤＬが

単独で新しいレストランを開いたという風に見られるとまずいし、どういう使われ方をするかはいくつか想定しておくべき。参加は段階的に、と考えていると思うが、サンドボックス的なことも考えたほうがいろんな発想が出てくると思う。
（高野座長）企画を公募してもよい。ＮＤＬラボのようなイメージでジャパンサーチ（仮称）ラボを作ってみるのも良い。
（田良島委員）アイディアソンなども実施できるとよい。
（高野座長）つなぎ役のグループの有志から、自分たちがデータを集めてやりたかった事などをその一つとしてやってもらえると、すぐにフィードバックが返ってきて、やって良かったという感じになるかもしれないので、そういったことをいくつか仕掛けたい。
（室屋委員）ジャパンサーチ（仮称）は素材提供で閉じる話ではないと思うので、ＡＰＩなども活用してうまくコンテンツを提供していくべき。キュレーションメディアはＲＳＳで記事をまとめてコンテンツを作る流れもある。うまくそれに乗ってほしい。
ジャパンサーチ（仮称）にデータが集まることで、こんな魅力的な見せ方ができるというのは編集の話。雑誌の特集ページを組むような見せ方だと思う。
タイプについて聞きたい。文化財とメディア芸術をわけると多くの議論を呼んでしまう。データのプロバイダ側が判断していいのか。組織の区割りを外れてもいいものか。
（徳原補佐）タイプについては、データベース単位でデータ提供機関側の選択式にしたい。元々、タイプを設けた意図としては図書館の資料が多いので、それをすぐに除けるようにしたかったということがある。タイプは複数選択可能で、2 つのタイプにまたがる場合は両方を選択し、足りないところは任意項目のカテゴリ（サブタイプ）として任意入力してもらう想定。
（室屋委員）この部分は美術館の中では毎回混乱する所。大きな括りでやらせていただければと思う。
（高野座長）美術館の図書館もあり、書籍なのに美術品として検索結果に上がってきても困るが、実務上そんなことをする担当者もいないと思うので、現物とすり合わせをして設定していくことになるだろう。
（杉本委員）タイプについて、元々アーカイブ機関のメタデータのスキームが違うので分けられているのだと思っている。一方でどういう種類のデータなのかは利用者の観点からして重要な事なので、基本をはっきりした方が良い。
（高野座長）そこは連携と活用の本質だと思うのでおかしくならないように進めていく。キュレーションページについては発信を一部ショーケースとしてやってみるという活動は必要だと感じていると思うので、適切なやり方で、主体や範囲をどうするか検討する。全体を集めてカタログとして示すことが重要な目的であるので、そこで誤ったメッセージにならないよう工夫する必要がある。
発信の情報主体をどうするかを含めて、運営体制は次回以降議論できればよい。
（後藤委員）今回のジャパンサーチ（仮称）の試験システムはどの程度の試験なのか。

ベースとなるシステムは本公開にほぼそのまま移行されるのか、それともかなり作り変える予定なのか、アーカイブ機関側の速度感にも関わるので現在の想定を確認したい。
（徳原補佐）2020 年までは、試験公開版と同じレベルと考えてよい。それ以降については未定。

６　その他
◯国立国会図書館より資料５－１に沿って説明。
・5 月 16 日にジャパンサーチ（仮称）との連携促進のための説明会を行う予定。

◯知財事務局より資料５－２に沿って説明。
・諸外国におけるデジタルアーカイブの取組状況に関する調査を 5 月以降に進める。

◯今後の予定について
（知財事務局）今夏以降、次回の日程調整を進める。